

「産業と文化の Re ミックスフェア」(平成16年1月20日～25日)
と日本産業技術史学会シンポジウム「産業技術史博物館と新産業の創造」

日本の伝統文化が最も豊かに集積し、さらに日本の近代化を担った産業活動が文化として蓄積されている関西において、あらためて産業と文化の密接な関係を見直し、将来に向けて新しい関係を創りあげることが課題になっている。「産業と文化の Re ミックスフェア」は、関西ベンチャー学会と日本産業技術史学会が主催団体として協力し、さらに地元自治体や新聞社、関西経済団体連合会など各経済団体等の協賛・後援を得て、この課題に応えようとしたものであり、今後も継続して開催されるであろう。今回実施された行事は以下の通りである。

1月20日(火)

「伝統産業と先端産業の融合フェア」(京都市勧業館「みやこめっせ」)

京都市・京都商工会議所・京都高度技術研究所が主催し、講演・研究発表のほか、30ブースで各社の研究開発・技術発展過程の展示、開発製品等の発表をおこない、京都の伝統文化と現代の先端産業との結びつきが具体的に論じられた。

講演 「伝統産業の活性化」柿野欽吾(京都産業大学教授)

報告 「エレクトロニクス・情報技術と伝統産業の融合化研究会」京都工芸繊維大学など

1月21日(水)

日本産業技術史学会シンポジウム「産業技術史博物館と新産業の創造」(後述)

1月22日(木)

午前10時～午後4時産業技術史博物館誘致促進協議会「千里仮収蔵庫」見学会

将来の「産業技術史博物館」のための貴重な寄贈品と収集品が現仮収蔵庫の取り壊しにともない、2月に旧鉄鋼館地下に移動するので、その前に見学会を開き多くの方々に見ていただくことにした。

1月24日(土)

関西ベンチャー学会神戸市シンポジウム「産業文化・観光と都市の再生」(神戸海洋博物館)神戸市・神戸新聞社等が後援。

午前11時30分より神戸港見学，午後1時30分より5時30分まで講演とシンポジウム

基調講演「新・観光資源論」 須田 寛（JR東海会長）

講演「21世紀社会のための科学技術：継承と変革」有本建男（文部科学省科学技術・学術政策局長）

さらに，関西ベンチャー学会が文化資産部会が中心になって進めてきた研究成果を中心に，角野博幸（武庫川女子大学教授）・清水宏一（京都市産業・観光局理事）・日野孝雄（神戸常盤短期大学講師）・後藤邦夫（桃山学院大学名誉教授）が講演し，そのあと討議をおこなった。

1月25日(日)

「ならまち豪商藤岡家の歴史と生活」（奈良市重要文化財藤岡家）

午後2時より，奈良市内の重要文化財になっている古い商家・藤岡家で，文化資産の保存と活用をめぐる見学会とシンポジウムを行った。

藤岡千穂子・中山禎輝両氏による講演とパネル討論。モデレータは坂川弘幸日本経済新聞社大阪本社企画委員。

なお，産業技術史学会のシンポジウムは以下の通りである。

シンポジウム「産業技術史博物館と新産業の創造」

日時：平成16年1月21日(水)午後1時～5時

場所：大阪科学技術センター 8階ホール(大阪市西区靱本町)

第1部 開会

メッセージ：「産業技術史と日本近代史」 梅棹忠夫（国立民族博物館顧問・元館長）

「経過報告と趣旨説明」 後藤邦夫（日本産業技術史学会会長）

第2部 講演

「産業技術史博物館に収蔵すべき記念物」 森田恒之（国立民族博物館名誉教授）

「新産業創造における産業技術史研究の意義」水野博之（高知工科大学総合研究所所長・元松下電器産業株式会社副社長）

「企業家精神と企業家ミュージアム」 宮本又郎（大阪大学大学院教授）

「科学技術政策と生涯学習における産業技術史」藤田明博（文部科学省審議官・生涯学習政策局担当）

第3部 シンポジウム

森田恒之 水野博之 宮本又郎 後藤邦夫(モデレータ)

主催：日本産業技術史学会

共催：関西ベンチャー学会

後援：関西経済連合会 大阪商工会議所，大阪府，大阪市，日本経済新聞社

協賛：国立産業技術史博物館誘致促進協議会

文部科学省科学研究費補助金特定領域(2)「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究(江戸のモノづくり)」項目A-03「器物・文献資料の相関研究

梅棹忠夫によるメッセージと後藤邦夫による趣旨説明の概略を以下に掲載する。

メッセージ：「産業技術史と日本の近代化」

わたしどもが産業技術史博物館設立の必要性を提言してから、すでに25年以上がすぎました。この間、故吉田光邦，中岡哲郎，後藤邦夫の諸氏を歴代会長とする日本産業技術史学会をはじめ、旧大阪工業会，大阪商工会議所，大阪府，大阪市などが核となってその設立に必要な資料の収集やさまざまな準備運動がすすめられてきました。しかし、目標の産業技術史博物館は、いまだに実現をみておりません。

20世紀は工業化の時代でした。それをささえた機械システムをうみだしたのは、まさに人間の知恵と技術でした。いま、おおくの途上国の目は、日本がいかにして短期間に近代化をはたしたかにむけられています。しかし、仏教文化，お茶，お花といった、いわゆる伝統文化をみせる施設はあっても、現代の日本の近代文明が何を背景に、どんな過程で成立したかを系統だててかたる施設がありません。現代の産業は、生産工程も製品も極度に電子化がすすみ、技術のすがたが見えなくなっています。ものづくりを実際に目にする機会をうしなした若者たちのあいだで、理科ばなれがすすんでいるのも仕かたないとはいえ、まことに残念なことです。

産業技術史博物館の資料は、企業，試験研究機関といった組織や団体に関係したものがおおく、社会全体の責任でささえてゆく必要があります。

20世紀前半の関西は、日本の工業化，近代化を推進した中心でした。奈良，京都が日本の伝統文化の中心であるならば、京阪神地域は近代文明の中心でした。

日本産業技術史学会が主唱者となって、すでに数万点の関係資料があつまっておりますが、公開できないまま保管されております。日本の近代文明として産業技術と、その歴史をつたえる施設をみなさまの強力なご支援をえて、この関西の地にぜひ実現していただきたいとおもいます。

平成16年1月21日

国立民俗学博物館顧問 梅棹忠夫

「経過報告と趣旨説明」

1970年の大阪万国博覧会を機に、「国立民族学博物館」が設立された。しかし、博覧会のテーマや展示物と関わりの深い「産業技術史博物館」は開設されなかった。この成り行きを遺憾とされた梅棹忠夫民族博物館館長（当時）は、1979年に「国立産業技術史博物館」の設立を提言された。

この提言を実現に映すべく、1984年「日本産業技術史学会」が設立され、大阪工業会（当時）、大阪府、大阪市とともに「国立産業技術史博物館誘致促進協議会」が結成された。以来、多くの努力が重ねられたにも関わらず、「産業技術史博物館」はまだ実現されていない。その後、日本経済の低迷、国家および地方自治体の財政危機、国立機関の独立行政法人化など、当初の計画の実現を妨げる要因が重なるばかりである。梅棹構想以来の調査研究活動の中で蓄積された資料類も活用されているとは言い難い。

他方、この間において博物館の世界で、いわば「パラダイム・シフト」が起こっている。「過去と異空間の保存と再現」「文化的差異の表現」「分類と展示」などといった、近代博物館の特性に加えて、「人々の交流と知識の創造の場」としての役割が課せられるようになった。産業技術史博物館の場合、収蔵品の多くは工業に関わる機械や道具であるが、一見スクラップと見まがうようなそれらの価値を決定するのは技術史のみならず、産業史や経営史、さらに職場史に関する知見である。それらの知見は、新たな産業の創造にとって不可欠なものとなるであろう。たとえば、最近「技術経営教育」の重要性が言われているが、そのコアは豊富な事例研究の分析であろう。

ここに、文化財保存、研究開発、経営史、生涯学習政策のエキスパートによって、博物館の現代的役割をめぐる講演と討論の機会が拡がり、多大の成果が生まれることを期待したい。

後藤邦夫